

-2- 啓明学校、石川県中学師範学校

金沢での高等教育のパイオニア

資料館客員研究員 板垣 英治

明 治4年の廃藩置県後、石川県は学制を改革して旧教育機関を廃止、小学校卒業生の増加とさらに高度の教育の必要性から、新たに中学校教員養成のために4年制の中学師範学校を9年2月20日に仙石町に開校しました。この学校は「文物ヲ煥発啓明セントスルコト」を目的として「啓明学校」と名付けられましたが、翌10年7月には「中学教員ヲ陶冶センカ為メ」に校名を「石川県中学師範学校」と改めました。これは明治8年に東京師範学校に中学師範学科が設置されたのに倣ったものであり、全国に他に例を見ないものでした。

本校は現在の金沢中央公園の仙石町通り中程にありました(図1、写真1)。職員は、元石川県学務専任の野村彦四郎校長と百束誠助副校長、英人ランベルト教長、教諭8名、助教諭5名で構成され、入学生は168名でした。教則によれば、甲、乙の二部として、



図1 加賀金沢細見図(明治9年9月)
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵

それぞれに下等の基礎教育2年間4学期と、上等の教育科目(5門、普通全科、理化両学、外国語、政体学、農学)の2年間4学期の教育が行われていました。しかし、まだ洋学が盛んでないこと、教科が乏しいことから外国人を教長として、特に甲部では洋書を専ら用いての教育でした。ランベルトの後任として、11年8月から23才の米人ホイットニー(Wills Norton Whitney)が教長となり、英語と物理・化学の教育を行いました。しかし、その勤務期間はわずか11ヶ月に過ぎず、翌年夏には東京に去つていきます。続いてウィン(T. Thomas Clay Winn)が着任しました。

写真1 石川県中学師範学校
「明治の日本—宮内庁書陵部所蔵写真—」吉川弘文館、2000より引用

「新選数学」は22万冊も売れたベストセラーです。関口の薫陶を受けた北条時敬は東京大学理学部数学科に進み、卒業後石川県専門学校で教鞭を執り、その教え子に西田幾多郎がいます。西田は一時、北条家に寄宿し教えを受け、更に第四高等中学校では、初め理系で数学を学んだほどです。彼にとって北条は生涯の先生であつたといわれるほど深い関係があつたのです。北条はその後、第四高等學校校長、広島高等師範學校校長、東北帝国大學総長、学習院院長等を歴任しました。また、徳田秋声もこの学校に在籍していました。

教 官で注目されるのは数学の関口開です。関口は加賀藩の藩校で学び、この学校と石川県専門学校(次回掲載)で教鞭を執りました。関口は和算をまず学び、次に西洋数学を独学して、22冊の数学書を翻訳・著作しました。中でも明治6年に出版した「新選数学」は22万冊も売れた

文部省は明治11年2月に全国の師範学校に物理教育の補助のために一組110点の物理器械を交付しました。本校に交付されたその器械の一部53点が現存することが最近明らかとなりました(写真2)。本校は僅か5年の存続で、明治14年7月には高等専門教育を目的とした石川県専門学校となっています。



写真2 明治11年の文部省交付器械
「電信器雛形」金沢大学資料館蔵

